

# 光 よ 光

ひかりよ、  
ひかり

著作 黒井ムラ  
絵 町田ナツメ

# もくじ

## CONTENTS

### 一、畸形の魚

### 二、従順な男は天国へ行けるけど

### 三、ポチ君、走る走る走る



# 畸形の魚



きけいのさかな



ぼくのおとさんは、おさかなやさんをしています  
おさかなをさばくおとさんは、とてもかっこいいです  
ぼくはおとさんをそんけいしています  
しょうらいはおとさんみたいになりたいです

よしなが こうき

「光輝は大きくなったら何になりたいんだ？」

「お父さんみたいなお魚屋さん」

「そうか。おまえ、魚好きだもんな。今週の日曜こそは、水族館、行こうな」

そういえばクラスで一番人気のある杏里ちゃんは、魚が食べれないから光輝くんとは結婚したくないと言っていた。魚を食べないと強くなれないんだよ、と言い返したら「女の子だからそんなの必要無い」と返されてしまった。

待ちに待った日曜日、光輝はそれぞれ父と母から手を引かれながら町はずれの水族館へと赴いた。寂れた水族館にはいつも客がまばらにしかおらず、不気味なくらいにしんと静まり返っていて、せっかくの休日だと言うのにほとんど人もいなかった。家族連れなんて自分たちしかいない事の方が多かったし、こんなに寂れた水族館よりもみんな郊外に出来たばかりの水族館へと行ってしまいがちであった。

それでも光輝はこの、人のほとんどいない水族館の空気が大好きでたまらなかった。元々内向的で人ごみの苦手なせいもあるのか、光輝にとってはこの場所がお気に入りだった。ペンギンもないイルカのショーもない、綺麗な熱帯魚なんてほとんどいないけれど。

どちらかといえばグロテスクで、不細工な深海魚たちで溢れかえる薄暗いこの空間が光輝にとってはどんなにカッコイイ鯨や鮫、うつくしい珊瑚礁、愛らしい魚たちよりも心を躍らせた。

この見捨てられた場所そのものが、まるで深海を思わせて――光輝にとってこの場所は限られた自分だけの箱庭のように感じられていた。

父は休みの日になると光輝にせがまれてこうやって水族館へも行ったりもしたし、他にも自分が出演している魚の解体ショーを光輝に見せてやったりもした。母に抱かれながら、光輝は魚をさばく父の事を心の底からかっこいいと思っていた。

ある日、父は釣りから帰ってくるなりに、「面白い物を見せてやるから」と言い、どこか意地の悪いガキ大将のようにやりと笑った。

父の置いたクーラーボックスに、光輝が興味深そうに小走りで近寄った。面白い物、の言葉に目を輝かせながら光輝がクーラーボックスを開けるように急かした。

「ほら」

父が蓋を開けると、なみなみと注がれた水面がまず目に入った。

「どこに入ればいいかわからなくてさ、ひとまずここに泳がせておいたんだが」

バシャンと一つ水の跳ねる音がして、光輝は目を丸くして中にいるそれを覗きこんだ。

――魚、だった。それだけでは至って普通なのだが、その魚はまるで墨汁の中にでも浸したみたいに真っ黒な見てくれをしてた。それなのに目ばかりがまるで血の様に赤く、更には片方の目が無い。抉られたようではなく、先天的に初めからそこに存在していないようだった。よく見たら背びれも無いし、鱗も存在していないようだった。

その異質すぎる姿に光輝はわっと悲鳴を上げ、気味悪そうに後ずさる。やがて光輝がわんわんと泣きだしたかと思うと母親に泣きついた。

「ありゃ、おかしいな。光輝、お前こういうの好きだろう？」

「ちょっとあなた……。一体何なの、それ」

光輝がまた異様な泣き方をするので流石の母も驚いてしまい、おずおずとボックスの中を覗きこむ。覗きこむやすぐに顔を歪めて、彼女は小さくおののいたのであった。

「ヤダ……。何なの、これ」

「凄いだろう？ こんな魚見た事無いよ。ひょっとして新種じゃないかな、なんて」

「それにしたって薄気味が悪いわ。真っ黒で赤目、それも片目しか無い魚……」

「珍しいじゃないか。さすがに食べるのには抵抗があるけど、少し飼ってみるのもいいんじゃないか。興味があるんだ、こいつに」

「止してよ！ あたし、頼まれたって絶対に面倒見ないわよ」

嫌悪感を露にさせ、彼女は首を横に振った。心の底から嫌そうにしている、これ以上無茶を言うとは機嫌を損ねてしまいかねなかった。

「――あ～、まあ明日職場の奴らに見せてやるくらいならいいだろ？」

「いいけれど、私何もしないから貴方が勝手に準備してよね。……。ほら光輝、いい加減泣き止んで」

その日の晩、光輝はおかしな夢を見た。

自分が深海の底に沈む夢。薄暗い、静かな海の底に沈んでいる筈なのに何故かきちんと呼吸ができた。光輝は先の見えない深海の淵をあてもなく彷徨う。泳ぐ、というよりは流れに沿って、たゆたうたゆたう水の中を漂うばかりなのだが。途中で、何度となく気味の悪い魚達とすれ違った。あの、寂れた水族館で見かけるようなグロテスクな造形をした魚達だ。

ふと、自分の足元をぬるりと何かが動くのが分かった。巨大な魚だ……。光輝は息を飲み、身構えてその足元を見た。

あの、父が釣った、畸形の魚がいた。

真っ黒い身体をぬるりと動かして、深紅の目が暗い海の底、残光を残して揺れ動く。姿形はアイツなのだが、その大きさは比喩物にならないくらいに大きかった。口を開いて襲い掛かってきたら、一飲みにされてしまいそうだ。その大きさに戦慄し、思わず悲鳴を上げると口から酸素が気泡となって溢れ出た。

――助けて！

必死でもがきながら浮上しようと試みる。

が、巨大な黒い魚が足元を纏わりついて離れてはくれない。滑った感触が心地悪く、寒気を覚えた。血のように赤い目と焦点が合う……。また叫んだ。届かない悲鳴は泡となって舞い上がるばかりで、光輝は抵抗も虚しく深い海の底、あるいは化け魚と化したそいつの口の中。それを確かめるすべも無く沈んでゆく自分の身体を知った。

夢から覚めた後、光輝は父にあの魚を逃すように訴えた。

「.....何だよ。光輝までそんな事言うのかい、別に悪い事してる訳じゃないんだよ」

「けどダメなんだ。怒ってるんだよ、そのお魚さん」

「怒ってる、って?.....どうして」

「夢に出てきて、僕を食べようとしたから」

「何だ、そんな事か。あれだよ、怖がりすぎるから夢にまで見てしまったんだな」

そんなものは所詮子どもの戯言でしかなく、父は笑うばかりで相手になどはしてくれなかった。こちらの食い入るような視線などは無関係に、時間は無常で淡々と時を刻むだけだった。父の持っていたバケツがぼちゃんと水を一つ跳ねあげた――。

それから幾度となく、あの魚の夢を見た。父は何故かその魚に魅入られたように、結局彼を逃そうとはしなかった。魚も魚で、母が特に飼育に関与せずとも寂れた水槽の中で凶たく生き残り、そして死ぬ事も無かった。

「やっぱりお前、新種なのかな」

「貴方、捨てるって言う約束でしょ？ それ光輝が怖がるのよ.....早くどこかやってくれないと」

「どうして。光輝、見に来るといいさ。大丈夫、大人しいんだこいつ。何もしないよ」

光輝は首を振って、決して近づこうとはしない。

ある日の解体ショー、いつものように父が取れたての魚をさばいている。光輝は何となく気乗りしなくて、嫌々母に連れられてやってきたようなものだった。父がさばくのは、活きのいい取れたての魚だ。魚はまな板の上でピチピチとその身を躍らせながら包丁が入るその瞬間を待つ。

「――光輝、見てごらん。パパがさばくよ」

もう何度も見て来たから知っているよ.....と内心飽き飽きした心地で光輝が思いながらも顔を上げると、そこにいたのは父では無かった。包丁を持っているのは、父なんかじゃ無い。魚の顔をした人間だった。いや、人間なのかも疑わしい――とにかく、魚だった。

「おかあさ.....」

まな板の上にいるのは.....考えるのも恐ろしかった。あの黒い、赤い目をした片目の魚が跳ねていた。魚の片目が、僕を、光輝をじっと睨んでいる。

「――お母さんっ！」

光輝が叫ぶ。その叫びが何か、空洞になった自分の中に虚しく響くだけの様な気がしてしまう――包丁が振り降ろされる。

「やめさせて、ねえやめさせてよ！」

訴えも虚しく、刃が魚に鋭く突き刺さる。聞いた事もないような、世にもおぞましい悲鳴がそいつから轟いた。

次いで、魚の黒い身が割れて、赤い血がどろりと溢れだした。瞳と同じ色をした、人間のものに近いそれは次から次へと溢れ出ては止まりそうも無い。血生臭い匂いがつんと鼻について、光輝が吐き気と戦いながら裂かれた魚をもう一度見た。黒い魚の姿はどこにもなく、代わりにそこにあったのは先程から姿が忽然と見えなくなった父の顔だった。

「お父さん！」

厳密には、顔だけが父の物で、身体はあの黒い魚そのものだった。

「お父さん！ お父さん！ お父さんが死んじゃうよ！」

その言葉を最後に、光輝は気を失った――。

目を覚ますと、父はちゃんとそこにいて、母も心配そうに自分を覗きこんでいた。

「.....ごめんな、光輝。お前があんなに怯えるなんて思わなくて。.....あの魚は捨てたよ、これでもうお前が悪夢に悩まされる事も無い」

申し訳なさそうに父がそう言って、光輝はそんな父と母と抱き合っ泣いた。だけどそんな事があってから数日後、父はみんなでお酒を飲んでくる、と言ってその日の晩は家にいなかった。

帰りが随分と遅く、母と二人して心配していた時にその電話が入った。その内容は、にわかには信じがたい話の連続だったようで受話器を持ったまま母がしばし茫然としていたのが印象的だった。

まず、父はお酒を飲んだまま自転車を運転していたという事。当然捕まって尋問されたが、その自転車が盗品だった事、酒を飲んだままだった事——それから父は警官を殴り飛ばして、転んだ警官は怪我を負ったがそれも気に留めずに走って逃げてしまったのだという。

「……あ、あの人がそんな事するはずないじゃないですか」

今にして思えば本当にそうだと思った。

父はどちらかといえば気の小さい、優しい男だ。そもそも自転車を盗む様な事だってやらない、酒を飲んで我を見失っていたにしろ、そんな事をした日には潔く謝ってくれる筈だったろうに……母は、最初から最後まで自分の耳を信じようとはしなかった。

その日以来、父と母の間には喧嘩がたえなくなり、あとはもう説明するのも煩わしい程の家庭崩壊だった。父は職を失った事で荒れ、ある日の晩母を殴った。その事が心の枷となったのか、自ら命を絶った。延長コードを器用に使って、首を吊った事により窒息死が原因だった。

——それからほどなくして、あの魚が戻ってきた

「何で……」

光輝が、古く、何もいないはずだった水槽の中に生き物の気配を感じたのはいつものように高校から帰って来た時の事だった。苔むして、薄緑の水槽の中にはいつの間にか水が揺れているのが分かる。そしてその中に……真っ黒い見てくれの、あのいつかの魚がたゆたう水中で揺れるように泳いでいるのだった。

こちらの気なんか全く知らないで。こちらの気なんか全く知らないで——

「父さん、なんだね？」

何故か、不意にそう思った。然るべく根拠や何か強い理由があったわけではなく、只本能的にそう感じただけなのだ。光輝は長い事、もうずっとずっと自分の中に抱え込んでいた筈の深い憎悪にも似た感情のやり場を見失ってしまったような気がした。今、違う、これから自分は、何を憎しみの対象としてこいつと向き合っていかなくちゃならないんだろう。少なくとも、今の自分には何が正しくて何が悪かったのか分からない。

光輝は、うん、と一つだけ笑った。今にも消え入りそうな程か細い、弱弱しい笑い顔だった。

——分かったよ、父さん。そうやって戻って来てくれると言うなら、僕はもうきみを拒絶したりしないよ……

水槽に触れるとどこかで懐かしい感覚さえした。とうさん、と力無い声で呼ぶとそれに応じるように魚が一つ、元気に跳ねた。

「……又シ？」

素っ頓狂な声で、教え子の片倉が聞き返す。あれから何年も時が過ぎて、光輝は生物学を教える教師になっていた。遙か昔に願っていた魚屋は、色々思う事があって止めておく事にした。

「ああ。……父さんが釣ったのはひょっとしたらその海の主だったのかな、とか、守り神様だったんじゃないか——いや或いは、その逆の悪鬼だったのかもしれないね」

読みかけの文庫本にしおりをしてから、光輝が本を閉じた。片倉は半信半疑といった顔つきのまま、肩をすくめて大袈裟に笑って見せた。

「まったまた……先生ったらそういう変な話が得意だよ。すぐそうやって生徒を怖がらせて」

「——嘘じゃないさ。その証拠に、今片倉が手を置いているそのテーブル。そこに置かれている水槽には例の魚がいる」

こちらの視線を追うみたいにして、片倉が驚きながら背後を振り返った。苔しか見えない汚れた水槽を見てから、片倉が

もう一度光輝の方を見た。

「よしてよ。何もいないじゃん」

「よく見ればいい。いるよ」

「や、やめとく……」

ぶるっと身震いするように、苦笑いを浮かべた片倉が身を縮みこませる。

「それよりも先生、今日ここに來たのは他でもないんだ。……また生物について教えてくれよ、特に知りたいのは人間のオス同士の交配だ」

「――止めろよ、学校だぞ。ここは」

「いいじゃん。誰も見てないだし」

片倉が性急に光輝のシャツの下に手を滑り込ませながら、背中に手をまわした。

「言っただろう……魚が見てるんだよ」

「馬鹿言わないで下さいよ、なんもいやしねえんですって。……ねえ、ハッキリと言いましょうか。そんなの妄想です、全部先生の妄想なんですよ。先生はずっと思い込んでいたんです、そいつはきっと只の魚なのに、先生は子ども特有の思い込みか何かで勝手に不気味な姿に捏造していただけですよ」

――妄想？ 捏造？ とんでもないな。……いるんだよ、あの水槽には今も……だって僕には今もこうやって見えてるんだから

薄汚い緑色の向こう側、赤い残光がずっと音もなく移動するのが見えた。規則的な運動から徐々に狭く、浅くなっていくその律動に光輝が何度か小さく喘いだ。片倉が動く度に光輝が微かな吐息を漏らし、片倉の腰に脚を回してその限界の時を誘う。光輝の太股に片倉が爪を立てる。

「なあ片倉……、あの魚は初めっから関わっちゃいけないものだったんだろうな。たまたま僕達の元へやってきただけで、本当なら違う人の元へ行ってたのかも」

「何言ってんすか先生……意味わかんねっす」

「そうか、ならそれでいいぞ……は、はは」

――ねえ父さん……、僕らは初めから呪われていたんでしょね。あの魚に。見初められた、とでも言えばいいのか。僕が生き続ける限りあいつはまた捨てても僕の元へとやってくる。父さん、僕ももうじきそっちへ行くよ……その水槽の中に、僕も沈む日が来るんだ

水槽の水がまたばしゃんと飛沫を上げたのだが、猿の様に行為に夢中になっている片倉は気が付かなかったのだろう。



そいじゃあ、みなさんさよーなら。





従順な男は天国へ

行けるけど



少し前までのシロといたらそこにいるだけなのに周りから避けられて、遠くからひそひそと噂されたり、挙句の果てには汚物扱いされていたのだから何がどう変わるのか分からない。

初めて声を掛けた時、シロはまるで死んだ魚のような目で涼太の事を見上げて来た。名前を聞いたらぼそぼそと聞きとりにくい声で「シロタ」とだけ呟いた。それが苗字なのか名前なのか今ひとつはっきりしなかったのだが、捨て犬のような彼を揶揄して「シロ」と呼んで可愛がる事にした。

シロはボロも同然の様な服を身に纏っていて、髭も髪も伸び放題でこれは汚物と呼ばれても仕方ないなと涼太は内心せせら笑った。風呂に入れてやる時も、シロは無気力そのものでどこを好き勝手洗おうとも何の反応も見せなかった。

清潔な衣服を着せてやると、それまでの不潔さ等一片も無くなったシロがそこにいた。……その日以来、シロはずっと涼太の傍にいる。涼太の飼い犬として、従者として、シロは涼太の命令には全部従う。黙って何でもいう事を聞いて、まるで本当の犬みたかった。ただ、本物の犬のように懐いて甘えてくれる気配はあまり感じられないのだが。

「初めは罰ゲームだったんだ。シロに声かけたのは。賭けに負けた奴が馱でいつも寝転んでるお前に声かけんの。でも、俺で良かったね。でなきゃ今頃お前あそこで凍死してたんじゃない？」

「……感謝しています」

いつも無気力なシロは、こんな涼太の嫌味にも何の反応も見せない。時には度の過ぎたワガママを言う涼太であったがシロは不愉快な顔一つとして見せず、黙って言う事を聞く。

シロは自分の事を全然話さない。涼太が面白がって問い詰めても「あまり覚えていない」とはぐらかされてしまう。かろうじて聞き出せたのは、シロはとてもいい大学を出ていい会社に入っていたと言う経歴だけ。

ちなみに言うと、シロが通っていたのは今現在、涼太が目指している大学だった。あともう少し頑張らないと……と、言われたばかりなのもあってか涼太はトゲを含ませながらシロに問いただしてみた。

「じゃ、何であんな風になってたの？ 墮落の仕方を教えてよ。そこまでいい学歴と職歴があるのにさ」

ややあってから、シロが相変わらず暗い声と表情で呟いた。

「……僕は誰かに指示されなきゃ何もできないんです」

そのどこか違和感を覚える言い回しに、涼太は眉間に皺を寄せるばかりなのであった。

ある日の午後、シロはテーブルの上の食器を片づけていたので涼太がまたいつものようにちょっかいを掛けに行く。「でもシロ、俺の父さんはシロより下のレベルの大学だったけどいい企業に入って、すぐに出世して、今は海外でバリバリ働いてる。結局こういうのが勝ち組っていうんでしょ？ 結果論っていうかさ」

「はあ」

「やっぱり最終的には金と権力のある奴が何だかんだ幸せなんだと思うんだよね～。いい服着て、いいもん食べてさ。金で買えないものって何？ 愛？ 馬鹿じゃないの、金がなくちゃどんだけ愛し合っても口論になるし喧嘩だってするでしょ。何かさぁどーでもいいよ、そういうの。形に残ってこそでしょ、何だって」

シロは聞いているのかいないのか皿を洗う手を止めようとしなかった。相変わらずからかい甲斐のない奴だ、と涼太は不服気に彼の背中を眺めた。

「シロ」

「何でしょう？」

「じゃあお前……指示されたら何でも言う事聞くの？」

ええ、とシロはやっぱり厭世的な目をさせたままで一つ頷いて見せた。涼太は少し俯くと、曖昧な笑顔を口元に僅かばかりに浮かべて声を押し出した。

「……だったら。だったら俺さあ、人が死ぬとこが見たいんだ。だから今すぐ死んで見せてくれよ。死に方は電車で飛び込みがいいな、あれって両親にめちゃくちゃ迷惑がかかるんでしょ？」

そしてそんな言葉を吐かれたところでシロは表情一つとして変えない。やっぱり無表情のまんまで、その心の奥底では何を思っているのか不明瞭な顔と言葉で答えるだけなのであった。

「いいですよ。じゃあ、これが終わったら」

指先に付いた洗剤を淡々と洗い流しながら、シロは考えている事などは億尾にも出さずに只そう呟いた。室内に、涼太の深い深いため息と、水の流れる音だけが静かに響いていた。

「……嘘に決まってんじゃない？」

涼太の少しばかり震えを帯びた声にも、シロはさして反応を示すでもなく軽く一瞥するだけだ。

「お、お前が居なくなったら、俺この家で一人ぼっちになっちゃうじゃん……」

珍しい涼太の感情の吐露にも、シロは動揺した様子も見せない。本当に憎たらしくなってくる程だ、その態度には。

「お前さあ……何なんだよ。俺の言う事、そうやって何でも聞きやがって。俺が恩人だから？ そうじゃないんだろ、誰の言う事でも聞くんだろ。マジで腹立つ。俺以外の言う事聞くな——聞いたら殺してやる」

「分かりました」

勿論、シロだったらそう言うに決まってる。

「——シロ」

「何でしょうか」

「今すぐに俺の事、抱きしめろ」

「手が洗剤まみれなんです？」

シロは両手を見比べながらさも不思議そうに尋ね返してきた。彼にとって命令の内容はどうだっていいらしい。

「いいから」

分かりました、とシロは言われた通りに涼太を抱きしめる。されるがままの人形みたいな動きで、その抱擁にはやっぱりどこか温度が通っていないように感じられたが。

「——父親が子どもを抱き締める時みたいにしろ、俺がいいって言うまで、ずっとだ」

「はい……」

それで制服の背中がぐっしょりと濡れてしまったが、もう気にもならなかった。多分、一生シロはこのまんまで、変わらずにこれからもずっと傍に居てくれる。涼太のどんなワガママにだって嫌な顔一つせずに答えてくれるし、自分以外の奴を見るなど言えばその通りにしてくれる筈だ。

嗚呼何て従順な犬、きっと涼太が愛を欲すればシロはそれさえも応じてくれるのだろう——出口のまるで見えない、光さえ差さない迷宮に一人置き去りにされてしまった心地がする。涼太はシロに抱きしめられながら、シロの華奢な腕の中でずっと泣き続けた。



ポチ君、

走る走る走る

「お前、いつもその犬とばっか遊んでんな」

身体の弱いユウヤにとって、友達と言えば愛犬のポチと幼い自分にも理解できる本だけであった。

ポチは自分が生まれるよりももう十年ばかり早く生まれた犬で、犬種は柴犬。十年以上も生きていて、犬にしてみれば随分な老犬だった。

もう人に吠える事も無く、とても大人しい犬だった。散歩の時はもう歩く気力もないのか、途中途中歩行を止めてその場に座り込む事も少なくはない。

ポチは元より温和な性格の犬なのだが、歳を重ねるごとに更に静かな子になってしまったようだ。

「ポチ、弱ってるから。少しでも傍に居てやるんだ」

「へえー……」

それでもユウヤにとってポチがかけがえのない愛犬であったのには変わりがない。幼いユウヤにとっても、もうポチが長くないのは何となくにだが予想できた事だった。しかしそんなポチの傍から離れないユウヤを、いつも面白く無さそうに見つめているのは幼馴染の隼人だった。

——クソ忌々しい犬っころだ！ お前が居るから俺はユウヤといつも遊べないんだよ

隼人はユウヤとは正反対の、いつでも外を駆け回ってばかりいるような少年だった。見た目どおりに活発で、主張も激しく感情の起伏も分かりやすい子どもだ。そんな隼人は自身に沸き上がる嫉妬心を、幼さゆえか見逃す事が出来ない。

隼人はユウヤを独占できない不満をいつだって抱えていた。そしてそれを発散するべく、ユウヤをいじめたのである。勿論、悪気はあってないようなもので、隼人にとっては子どもにはよくある気になる相手の気を惹きたいがために……というぐらいのちょっかいの掛け方だったのだけれども。

それでも大人しいユウヤにとってはパンチやキック一つでも、泣きべそをかいてしまうくらいに痛かったのだった。

「ポチ、僕またいじめられたよ。隼人くん、いつも僕をいじめて遊ぶんだよ……」

もう自分ではほとんど走る事も出来ないポチを抱きしめながら、ユウヤはそうやっていつもいつも泣いていたのだった。

——……

「……またあの夢か」

疲れている時に限って、何故か昔の夢をよく見る。昔というのは決まって、自分とポチと、そして隼人がいたあの頃の時代。ユウヤはベッドから降りるとまず歯磨き、顔洗い、そして朝御飯の順に事を済ます。そんな朝の作業を順々にこなしながら、夢の事よりもまず昨晚の出来事をユウヤは思い返していた。

——ああ、そういえば僕、昨日男に告白されたんだっけ……何だったっけなあ、名前。いつも配達に来る……歳もほとんど一緒だったような、そうじゃないような……

運送屋の名前は思い出せるのだが、肝心のユウヤに告白してきた彼の名前がまるで出て来ない。思い出せるのは優しいような笑顔と、告白を告げるなりこちらの反応も待たずして照れ臭そうに走り去ったあの後ろ姿だけだ。ろくに喋った事も無いのに彼は、何故かそんな自分を好きだと言った——不思議だった。

ユウヤは会社へ行く準備を済ませて、いつものように車を走らせた。あれからもう何年もたった今でもポチに似た犬を見るとつい目で追ってしまう。いつもゆっくりゆっくりと足を引きずるようにして、垂れさがった尻尾を左右に振りながらポチはそれでも何とか歩いていた。

「あの、えっと、遠野さん」

事務所内を掃除していると突然名前を呼ばれて、ユウヤは振り返った。

昨日の、例の告白してきた運送業者の青年が立っている。やはりまだあどけなさの残る顔立ちと、その制服が馴染んでいない様な印象を受ける……。

「ああ、どうも」

ユウヤからの素っ気ない返事を受けて、青年はどこか気まずそうな顔をさせてから帽子のつばを掴むとそれを目深に被り直す。

「——あの、遠野さん。昨日は突然変な事言ってすみませんでした」

「別にいいよ、気にしてないから。……でも何であんな事言ったの？ 思いつきで？」

静かに青年は首を横に振り、その問いかけを否定する。

「いえ。至って真面目っす……でも、引きましたよね、流石に」

語尾に自嘲する様な笑いを混ぜながら、青年が吐き捨てるように言う。彼が一番気にかけているんであろうその問いかけの部分にはあえて触れず、ユウヤは肩を竦めるのだった。

「……。何で、僕なんかを？」

それから、中断してあった掃き掃除を再開させつつユウヤが問い掛ける。青年はややあってから、やがて意を決したみたいにして話し始めた。

「え、っと——遠野さんって、何て言うかその……凄いミステリアスで思わず惹かれちゃったんですよね。何て言うか見た瞬間に、あって思ったんです。この人、いつも遠い目をしてて何を考えてるんだろうな——とかアレコレ気にしてるうちに目で追ってて気付けばつい……みたいな？ 俺はこういう時しか会社入れないんで、イメージでしか語れないんですけども……ぶっちゃけちゃうと見た目に入ったのは間違いないですっ！ アハハ、駄目っすか？ この理由……だ、駄目っすよね……は、は……」

「……」

その日の晩も、ユウヤは夢を見た。

「お前の本なんてこうしてやるよ！」

「やめてよ隼人君！ 何でそんな酷い事するの……」

まだ買ってもらったばかりの本を、橋の上から川の中へと落とされてしまった。さすがに追いかける事は出来ずに、泣くほか抵抗する術が無かった。隼人はそれでも飽き足らずに、ユウヤが手に抱えていた本を全部奪い取ったのだった。

「お前、いつも本ばっか読んでて暗いし！ たまには俺らのサッカーにも付き合えよなあ」

「やめて、返してよ」

その体格差は勿論だったが、力や運動神経などでは到底適う筈も無かった。奪い返そうとすればするほど却って自分が翻弄され、実に滑稽な姿になっているばかりであった。悔しいのとどうにもならない悲しさでユウヤは只、その場に泣き崩れる以外に思いつかなかった。

「あ、また泣いたあ！ 泣き虫ユウヤ！ 泣いてばっかで女みてー！」

「返して……その本は……」

「悔しかったら奪い返してみろよ〜っ！」

隼人にとってはほんの出来心で、好きな子の気を惹きたいがために相手をイジメてしまう心境と同じものだった。涙ぐむユウヤの姿に、彼をまるまる支配したような錯覚を覚えてしまい、無邪気な嗜虐欲を無意識のうちに剥き出しにさせながら隼人はそんなユウヤの反応を楽しむばかりだった。

「——う、うわっ!？」

しかし突然のよう、聞こえた隼人の悲鳴。反射的に、ユウヤが俯いていた顔を持ち上げた。

「……ポチ？」

いつもはあんなにも気だるそうに、歩くのですら精いっぱいといった様子であったポチが、その脚で走っている。ポチは今までに聞いたことも無い様な低い唸り声を上げながら、隼人を威嚇した。

「何だよ犬ッころ、あっち行けよ！」

しっし、と手で払われてもポチは頑として引こうとはしない。懸命に立ち向かい、隼人から本を奪い返そうとしているのかは分からなかったが、何度も隼人に飛びかかっているのだった。

「……や、やめろよっ！」

隼人がポチから逃れようとし、道路に飛び出すのが見えた。あ、とユウヤは思った。手を伸ばした、でも多分間に合わないだろう。結果、その行為は彼らにとっては何の意味ももたらさなかった。

「ポチ、隼人君……危な……」

それは全て言い終えぬうちの、僅かな間の出来事であった。本当に一瞬のうちの事故、作り物の世界を見ているのではないかと錯覚する程に鮮明で。

「……駄目だ、ありゃ犬も子どもも、もう死んでる。見て分かるだろ？ 即死だよ……どっちも」

救急車と、パトカーのサイレンの音がけたたましく鳴り響いた。トラックの運転手も急ブレーキを切ったがために怪我を

したそうだが、幸いにも軽傷で済んだそうだ――。

「くん……遠野君」

「え？ あ、はい」

会社でコピーを取っていると、突如上司から声を掛けられた。

「そこ、君に話しあるって。あの配達員さんが」

上司が指差すのを見ると、例の彼が立っている。目が合うなり、帽子を外してぺこりと一つ頭を下げて見せた。それまでは帽子で隠れており見えなかったが彼の髪は明るい、金に近い茶系の色をしている。そんな髪色でよくその運送会社に勤められたものだと思った――。

「あの……返事、聞かせて欲しいんです。自分、結構しつこいっすよ。はっきりとした言葉もらえるまでは通い詰めますんで！」

そう言って青年はいつも営業で見せているような爽やかで、少しあどけない笑顔を見せた。ユウヤは彼から視線を逸らすよう、少し俯き気味になってしばしどこか遠い目をしていた。その目に何を映すでもなく、夢――否、過去のあの出来事についてしつこく考え込んでいた。

いつでもあの出来事は、自分を逃がしてくれる気配はない。自分が生きている限り、きっとどこまでもどこまでも追いかけてくるつもりだった。この世で一番恐ろしいもの。それが消し去る事の出来ない、現実という名の本当の悪夢だった。

「……本当に僕でいいんですか？」

「ハイ！ 遠野さんがいいっす」

当たり前だが彼はこちらの思惑なんかはまるで知る由もないようで、白い歯を覗かせてニンマリと笑う。いたずらっぽい、邪気の無いその笑顔に打たれたようユウヤは肩を竦めた。何か言い知れぬ敗北感めいたものまで覚えてしまい、ユウヤはふっとため息を一つ吐き出しつつ無意識のうちに微笑んでいた。

「――遠野さん、ってのも何かよそよそしいよ。ユウヤでいいから。それと、君の名前も教えてよ」

「あ、了解ですユウヤさん！ 俺はですねえ……」

言いながら青年はポケットから若者らしくスマートフォンを取り出した。ちなみに同じく若い癖にどこか流行から取り残されているユウヤは、未だにガラケーを愛用している――隼人はスマートフォンを器用に片手で操作させながらそれを差し出してきた。

「『隼人』って言うんですよ。……あっ、ちなみに字はこんなで」

隼人、はそのスマートフォンに登録された自身の番号と名前をちらつかせながら、まためいっぱい笑顔をこぼす。ユウヤはしばし茫然とし、その画面に目を奪われたように見入っていた。

「これからヨロシクっす。ユウヤさん！」

少しばかり照れ笑いを浮かべて隼人が握手を求めて手を差し出してきた。その声に、ユウヤはようやくそこから目を離す事が出来た。顔を上げると、変わらず眩しいくらいの笑顔を浮かべる隼人がいた。

ユウヤは、幼い時の記憶に残された隼人の顔を思い出せなくなっている事に気がついた。まだ冬の寒さが残る気候の中で、ユウヤは泣き声にも似た微かなため息を静かに漏らしつつその声押し出す。喉の奥から。

言わなくては、と思った。言え、言うんだ、と言い聞かせた。言わなくちゃならない、と頷いた。

「――ええ。貴方と。……貴方とお付き合いさせていただきます、隼人くん……」



サイトにて2011年ごろに置いてあった（曖昧）  
作品を加筆・修正したものです。  
読んで下さった皆様に感謝!

Thanks :

挿絵・町田ナツメ様

(<http://note.tre.oops.jp/>)

目次写真・『君に、』様

(<http://kmn-z.com/>)

and gave me smile.



thank you for...